



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年も見事な稲穂が黄金色に実り、新米の季節がやって来た。栗、みかん、さんま。食卓の秋も楽しい。運動会に文化祭。「芸術の秋」の到来だ。10月の新九郎も、写真展、日本画展、水彩・油彩画展となじみの企画が登場だ。第8回小田原映画祭が始まった。手作り映画祭を支えるのはなんとといっても観客の力。「映画の秋」にも、ギャラリーにも足をお運びいただきたい。

新九郎 10月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会期 展覧会名	見どころ
	10/1(水)~6(月) つばめ友友会写真展	20名の会員による写真展 風景・草花・人物・各地の行等 自由なテーマの作品約60点
	10/8(水)~13(月) 第14回 新樹展	小田原を中心とした会員で、毎年発表している日本画のグループ展。会員8名、約30点
	10/15(水)~20(月) 第17回 湘展	絵画教室の作品展 身近な風景や静物等の水彩・油彩 講師：住谷重光氏
	10/17(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
	10/22(水)~27(月) 第14回 フォト∞ムゲン写真展	富士写真フィルムOB 7名の会員による写真展、約60点
	10/29(水)~11/3(月) 第15回 人生遊々展	旧三中三期生による作品展 水彩・油彩・水墨画・書・絵てがみ・写真・盆栽・花・人形・陶芸等

会期・展覧会名	会場
9/20(土)~10/13(月) 水木休 齊藤寛之個展	ギャラリーさざれ石 0463-67-9662
10/1(木)~10/6(日) 水墨画 西山慶子展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/2(木)~10/6(月) 第26回 絵好会展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
10/9(木)~10/13(月) 第18回 百景展	アオキ画廊 1F・2F 0465-23-5624
10/9(木)~10/13(月) スケッチング ウークの会 小田原グループ展	ツノダ画廊 0465-22-4263
10/8(水)~10/13(月) 第23回 アトリエベルフォーレ展	飛鳥画廊 0465-24-3790
10/15(水)~10/20(月) 第7回 我楽多展 曾我壽佳子	飛鳥画廊 0465-24-3790
10/8(水)~10/13(月) 第8回 楽の会 水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/22(水)~10/27(月) 第36回 グループ・アトリエ展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/15(水)~10/19(日) 第79回 西相展	小田原市民会館 問合せ 0465-37-8543

東海道五十三次 14 浜松(浜松城) 5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行

松野光純



浜松城は、徳川家康が、遠州攻略の拠点として、引間城を拡大して築いた城で、出世城として知られ、家康以降も水野忠邦をはじめ老中などに出世する者を輩出した。

家康は、元亀元年(1570)に入城し17

年間在城した。東西600m、南北650mの規模を誇り、石垣は野づら積みと呼ばれる堅固な作り。昭和33年に天守閣が再建され公開されている。家康は、この地を引間から浜松へと地名を改め、城下町と宿場町を合わせた町に整備。本陣6、旅籠94と、東海道最大規模の宿場だった。

太平洋戦争で町のほとんどは焼けてしまったが、徳川ゆかりの社寺が今も残り、伝統ある凧揚げ祭りは名高い。

思うことなど 横井山 泰



新九郎の個展の搬出の翌朝はナラヤカフェの搬入で、なかなかハードなスケジュールであるのだが、最終日を嬉しく迎えられたので、雨の宮ノ下も気持ちのいい朝だった。(ありがとうございます!!)

ナラヤカフェは宮ノ下の老舗旅館だった奈良屋の元社員寮をリノベーションしたカフェである。足湯もあり近年、箱根の名所なのだそうです。(設置作業中も客足は途絶えない) 駅を降りると目の前にギャラリーの入り口があり、階下がカフェになっている。坂道に建っているのがカフェのカウンターからギャラリーを見上げると、びっくりするくらい高い吹き抜けになっている。ギャラリーの壁は漆喰である。梁や床も齢をとっているので大きな窓から迫る山と調和して、何とも言えない気持ち良さである。

昨年何回か下見をして練った計画は「調和」である。作品が大きな声で主張するのではなく、ずっと昔からそこに居て「ひそひそ」話しているような空間にしたかった。また、猫好きのスタッフが多いので「猫」の作品を集めた。自然、かなり過去の作品から新作までの展示になった。学生時代、廃棄されていたイゼルを額にした作品は、吹き抜けの手摺と一体化したし、グレーの世界で霞を描いた大作は漆喰の壁と繋がった(パッと観、壁に観える)。吹き抜けから見上げた場所にはグリーンの強い色を入れた。「ここだから出来る」ホワイトキューブでない空間も面白い。

市民会館では広島市現代美術館の神谷幸江さんの講演を聴いた。「地域性」「特化する」「これは芸術であるという新しい価値をつくる」など学芸員の仕事を、小田原の「さかなまつり」(当日獲れた魚を)(教育目的で)(並べる)も例に「ある意図(Why?Now?Here?)を持って並べれば展示である」とお話しされていた。

第5回文化セミナー（小田原市文化政策課主催）

—学芸員の仕事と場の関わり—

講師：広島市現代美術館学芸課長 神谷幸江 に参加して

小田原出身の神谷幸江さんは、広島現代美術館で新たな企画を発信し続け、2011年には、「サイモン・スターリング」展で西洋美術振興財団学術賞を受賞されたキュレーターである。まだ美術館を持たない小田原市であるが、3年後に完成する「創造文化センター」の活用のヒントを得たいと、講演会に参加した。

大学で美術史を学び、絵は描けないが絵を学ぶことに興味を持ち今の仕事に行きついたという神谷さんは、東京芸術大学大学院で美術史を学んだあと、オランダアムステルダム美術館とアメリカニューヨークのニューミュージアムでのキャリアを持っている。伝統あるヨーロッパ美術と新しさ自由さの代表ニューヨーク、欧米での実務を積んでこられた稀有なキュレーターだ。

広島を例にとって美術館・学芸員の役割についての具体的な話は、大変に興味深いものだった。

原爆ですべてを失った広島にとって、人々が力強く踏み出すために美術館が不可欠なものであったという出発点が、広島にはあった。ヒロシマ賞では広島でしか作れない作品の展示をしてきた。北京オリンピックの花火のデザイナーをした蔡國強（ニューヨーク在住）の50メートルの曲面に火薬を爆発させて作る作品『死せる自然』（2008）や、オノヨーコによる『希望の路』（2011）という音楽とのコラボインスタレーションの紹介があった。

ここでは、今までは美術館ではやれなかったことを形にするという大胆な企画を実現させた。現代アートに関心を持ってもらう理解の窓口としてのパフォーマンスがあった。印象派はわかるけど現代アートはわからないという人々も、何度も何度も見てもらうことで慣れてくる。「これはアート？と関心を持ってもらうこと」「固定概念を覆す展示」「日常の視点を変えてくれる展示」という言葉で、まさに現代アートを伝えていた。

ご自身の企画した展覧会のほか、特色ある企画展の作家を訪ねることを毎日の体力づくりのように行って作り手の情報をキャッチする努力も怠らない。

創造文化センターの完成後の私たち市民一人一人が、その場をどのように活用し文化を享受をしていくのか、また外部から多くの方を呼び込むことが出来るのか、市民としてどんなサポートができるのか、真剣に考えることのできた貴重な時間となった。

美術館は、かつての「美の要塞」として保存鑑賞するという役割から、体験して考え体現する場所、都市の開かれた場所として外も内も変わっていくというこれからの美術館のあるべき姿が、神谷さんのお話から浮き彫りになった。その中で、「キュレーターのミッション」は、「水を満たしていくように運営する役割」とご自身を現した。物の展示だけではない、社会と表現をつなぐ媒介者として、社会とのつながりを広げる役割を担うキュレーターの発信力に、私たちももっと注目をしていきたい。

（新九郎友の会 木下和子）



『ようこそ松永記念館』 第4回松永記念館交流美術展「清雅なる原三溪の書画—旧松永コレクションから—」

本展は、三溪園のご協力を得て、原三溪（富太郎）自筆の書画のうち、松永記念館の設立者・松永耳庵（安左エ門）がかつて所蔵していた作品（旧松永コレクション）をご紹介します。

耳庵が敬愛し親しく交流した原三溪（富太郎）は、実業家として、また、益田鈍翁（孝）や耳庵とともに「近代三茶人」の一人として知られます。三溪の母方の祖父が南画家の高橋杏村だったこともあり、三溪は幼い頃から、おじ（杏村の長男）に絵の手ほどきを受けたといひます。事業のかたわら筆をとり、書画をよくした三溪が残した作品は、生涯で千余点にも及びます。その画は花鳥や旅先の風景を描いたものが多く、漢文の素養もあった三溪は、しばしば画に関連した詩や讃を画中に認めています。

展示作品の一つで、三溪から耳庵に贈られた「蓮華図」（昭和12年）は、蓮を好んで描いた三溪の画のなかでも一番の大作で、琳派の画風に学びつつも、独自のおおらかさを湛えた作品です。

日本画家・前田青邨が「原さんの絵は何んといふか、調子の高い、個性のはっきりした、専門家には絶対に描けない画であった」と称えた三溪の書画、ぜひこの機会にご覧ください。

松永記念館学芸員 中村暢子

会期 平成26年10月25日（土）～11月24日（振休・月）

時間 9:00～17:00 観覧料 一般300円

「蓮華図」（昭和12年）

高校生以下、福寿カード提示者のかた、障がい者手帳をお持ちのかたとその介護者のかた（1名）は無料

絵てがみ折々 —小田原の暮らしの中で—



野地 三恵

大磯の照ヶ崎海岸に、海水を飲みに来るアオバトがいるという話を聞いて久しい。その青い鳩を一度見てみたいと思っていたが、この夏の早朝、思いがけず出かける機会があった。

港の堤防の上が観察スペースになっていて、目の前に磯が広がっている。そこで双眼鏡を構えて待った。大磯丘陵から、幾つかの群れが盛んに飛んでくる。体の色は青というよりは黄緑色で、それが朝陽に照らされて輝くさまはとても美しい。上空を旋回して、しばらくすると岩に降り、窪みに溜まった海水を飲んでいく。波しぶきを浴びながら岩を移り、やがて群れは帰っていく。10月頃でアオバトの飛来は終わるといふ。また来年。

9月のこと

※女流展ではSさんの「風化」という作品が印象に残った。全体に落ち着いたトーンで品のあるグレーの地にわずかな黄と赤の配色、ストライプ、鉛筆の引っ掻いた線、トタンに浮かぶ錆びの美しさを感じさせるような絵だった。

※水曜会は毎年故柏木房太郎先生の絵が展示されるのが楽しみのひとつである。地元箱根をはじめ地方を訪ね美しい風景画を多く残した。水曜会のみなさんに思い出を色々とお聞きした。仕事が無かった時、一緒に歩いてくれて就職先を世話してくれたこと。入門の時持参した絵をみて「絵は下手でいいんだよ。すぐ上手くなる人はやめてしまおう。長く続けてゆっくり上手くなればいいから」と人を見て優しい教え方をした。皆さん様に温厚で優しい氏の人柄を懐かしんでいた。昔、先生のコレクションを誇らしく語る人がいた。西相美術協会会長も務められた先生は小田原で最も愛された画家の一人だろう。作品はご家族が大切に保管されているが、小田原市の重要な美術作品として市に収蔵されることを願う。

※清閑亭では「面白い技術」という若い現代アートの作家のグループ展があった。地域出身の彫刻家のつながりで、武蔵野美術大学、京都市立芸術大学、大阪芸術大学出身の30歳前後、8人の作家が参加した。歴史ある静かなたたずまいの日本家屋に現代アートがふしぎとマッチしている。作家として中央で発表する事は欠かせないが、ゆかりある地方とのつながりも大切にしたい。今回の試みは作家自らが行動し実現したもので意義があると思う。西湖地域にも中央で発表する優れた作家も多勢いる。合わせて地域での発信も増えてくると楽しみである。Ⓜ